

東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	第5回東邦大学医療センター大橋医学会
作成者（著者）	東邦大学医学会編集委員会
公開者	東邦大学医学会
発行日	2019.03.01
ISSN	00408670
掲載情報	東邦医学会雑誌. 66(1). p.92-94.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	学会抄録(分科会)
著者版フラグ	publisher
メタデータのURL	https://mylibrary.toho-u.ac.jp/webopac/TD62917375

第5回東邦大学医療センター大橋医学会

平成30年7月18日(水) 17時30分～19時30分

平成30年7月19日(木) 17時30分～18時40分

東邦大学医療センター大橋病院臨床講堂

7月18日(水)

開会の辞 齋藤紀彦

研修医研究報告 I

座長 齋藤紀彦

1. 消化管壁構造を伴った胆嚢異所性腺の1例

浅川奈々絵 (2年次研修医)

横内 幸, 高橋 啓 (病理診断科)

83歳女性. 肉眼的に胆嚢頸部に35×30mm 大脳回状粘膜肥厚を認めた. 同部位では組織学的に粘膜, 粘膜筋板, 粘膜下層, 固有筋層, 漿膜下層が観察され, 消化管壁に類似した. また粘膜から粘膜下層内に導管, 腺房を散在性に認め, ランゲルハンス島の形成はなく einrich II 型異所性腺と診断した. 胃底腺を認めないが, 表層粘膜上皮の表層側に MUC5AC, 深部に MUC6 の発現する領域が存在し, 胃組織迷入の可能性が示唆された.

2. ペースメーカー植え込み術施行2ヶ月後にポケット感染をきたした1例

佐久間美菜子 (2年次研修医)

橋本 晃, 井出志穂, 牧野健治, 林 典行, 徳江政英 (循環器内科)

58歳男性. 房室ブロックに対しペースメーカー (PM) 留置術を施行された2カ月後, PM 留置部の発赤・腫脹を主訴に来院した. PM ポケット感染の診断で入院とし, 第4病日にPM 抜去術を施行. 術後経過良好であったため第17病日に退院とした. 本症例は手術療法が可能であったが, PM 感染は診断が難しく, 診断されても全身状態不良で根治療法が行えないこともある. 感染を生じさせないことがPM 管理において最も重要であると考えられた.

一般演題 I

座長 高橋 啓

1. 悪性脳腫瘍に対する最新治療

齋藤紀彦, 青木和哉, 平井 希, 藤田 聡, 中山晴雄, 林 盛人, 伊藤圭介, 櫻井貴敏, 岩淵 聡 (脳神経外科)

当科では悪性脳腫瘍の診断・治療に力を入れており, 神経膠腫などの悪性腫瘍に対しても, ナビゲーション, 電気生理学的モニター, 脳機能画像化による機能温存手術, 神経内視鏡の積極的利用など, 多くのモダリティを駆使し安全で確実な手術を行っている. また新しい WHO 脳腫瘍分類に必要な遺伝子診断にも対応し, 遺伝子解析結果に基づくテーラーメイド医療を行い, 治療成績改善に努めている.

7月19日(木)

研修医研究報告 II

座長 林 盛人

1. 腰椎穿刺で確定したくも膜下出血の1例

鈴木淑能 (2年次研修医)

櫻井貴敏 (救急集中治療科)

太田祥一 (東京医科大学救急・災害医学分野)

30歳女性。2017年11月某日11時より突然の激しい後頭部痛と嘔気・嘔吐で当院へ搬送された。神経症状なく頭部CTで出血等の所見を認めず腰椎穿刺施行し、淡々血清の髄液を採取しくも膜下出血と診断した。脳血管造影で左内頸動脈に2つの動脈瘤を認め入院翌日に脳血管内治療施行。術後は再出血・脳血管攣縮等の合併症なく経過し第20病日に退院した。頭部CTで診断できず腰椎穿刺により早期診断できたくも膜下出血の症例を経験した。

2. 帯状疱疹に自己免疫介在性脳炎を合併した一例

渡邊南美 (2年次研修医)

中田 茅, 長澤知也, 福田英嗣 (皮膚科)

89歳女性。感冒症状を主訴に救急搬送。帯状疱疹に伴う髄膜炎を疑い入院後意識障害が出現した。髄液所見で髄膜炎は否定的で、せん妄やACV脳症も鑑別し環境調整やACV外用変更など試みたが改善なく、再施行した髄液検査、MRIで診断となりステロイドパルスが奏功。帯状疱疹による自己免疫介在性脳炎の報告は見られず稀な症例を経験した。帯状疱疹はありふれた疾患で自己免疫介在性脳炎が起きる可能性を念頭に置き対応する重要性を学んだ。

3. 無酸素運動後に急性腎不全をきたした一例

廣内尚智 (2年次研修医)

岩崎昌樹 (腎臓内科)

初診時、AGML、急性腎前性腎不全と誤診された運動後急性腎不全の症例を経験した。同疾患は症例報告が散見されるものの、十分に周知されているとは言い難く、急性期、回復期のMRI画像と合わせて報告する。

一般演題 II

座長 青木和哉

1. がん就労支援に関するセミナー実施を振り返る～アンケート結果から見てきたもの～

市浦華奈子, 立石昌子 (がん専門相談員/ソーシャルワーカー)

武者芳朗 (整形外科)

堀孔美子 (患者サポートセンター)

真鍋 伸 (総務課)

吉野彩香, 伏見 円, 高鶴亜理紗 (ソーシャルワーカー)

千手由里子 (ソーシャルワーカー室事務員)

当院では『東京都がん診療連携協力病院』の認定を受け、「がん相談支援センター」を設置している。センターの業務内容として「就労に関する相談」が明記されており、就労の専門家との連携が求められている。連携の一環として、社会保険労務士へ講師を依頼し、がん患者及び家族を主たる対象に、「がん治療と仕事の両立支援セミナー」を実施した。その取り組みを振り返り、ここに報告する。

2. 川崎病類似マウス系統的血管炎における自然免疫受容体の関与

大原関利章, 横内 幸, 榎本泰典, 佐藤若菜, 高橋 啓 (東邦大学医学部病院病理学講座)

カンジダ細胞壁由来のマンナン・βグルカン蛋白複合体で誘導される川崎病類似マウス血管炎モデルを用いて自然免疫

受容体と血管炎発症との関連を検討した。βグルカン受容体であるデクチン1 (D1) とαマンナン受容体であるデクチン2 (D2) の遺伝子欠損マウスに起炎物質を接種した。D1-/-では全てのマウスに血管炎を生じたが、D2-/-では血管炎を生じなかった。D2によるαマンナンの認識が血管炎発症に重要である。

3. 東京都区西南部における脳梗塞急性期血栓回収病院間連携の取り組み

林 盛人, 藤田 聡, 鈴木 遼, 佐藤健一郎, 齊藤紀彦, 中山晴雄, 平井 希, 青木和哉, 岩渕 聡 (脳神経外科)

2014年にステント型血栓回収デバイスの有用性が報告されて以降, 急性期脳梗塞に対する脳血管内治療は劇的に治療件数が増加している。しかしながら, 治療件数の増加と治療医の人数には隔たりがある。そこで, 東京都区西南部では病院間連携体制を構築し, 積極的な病院間連携を行っている。今回, 同システムの詳細と3年間の運用実績を報告する。

閉会の辞 青木和哉